

東遼河の鉄橋工事、新京飛行場の整備工事など強制就労時には戦場から死体搬まで夜中にも狩りだされました。

九月中旬工事終了。内地送還の声を聞いた時は本当に心の底から喜んだものでした。主客転倒の立場で、しかも慣れない労働には全く閉口の限りでした。工事完成祝賀宴に招待は受けたものの、毒酒など飲まされ故国の土を踏めなくなる心配もあり出席しませんでした。

十月半ばコロ島から佐世保へ、佐世保の山並みが見えた頃一同目頭を熱くしたものでした。佐世保から汽車で山形神町に四日後に着きました。南京袋で手製のリュック一つ（中身はほとんどボロ）が両親への土産でした。

妻や五人の家族を外地に残してきたことへの言い訳も出ず、自分の家にかかることすら遠慮して、先行する涙にはどうすることも出来ませんでした。妻子を殺して自分だけが帰ってきたのではないかと両親は疑いの目が晴れませんでした。引き揚げ後十三年目に妻子五人分の合同葬式もしてやり冥福を祈っております。

昭和三十八年夏、在満の妻から便りがあり、まだ私は生きてゐる、現在は再婚して現地妻となり三人の子供あ

るといふ。四十八年に一時帰国の許可が下り帰国しましたが老母はすでに他界していました。五人分の戒名を書いた位牌があるが満州には持って帰りませんでした。その後、音信不通となり消息不明でした。風の便りではもう亡くなったとのことですが戸籍はまだ東根市に残っています。

ハルピン駅の迷子を無事親元へ

山形県 結城 久子

私の夫は満州国協和会副参事で、東安省雞寧県事務長をしておりました。

昭和二十年八月八日夜、ソ連軍は空陸両面から越境侵攻の情報で国境の雞寧県は騒然となりました。

夫は県公署会議室にあって、久保田豊貞長、警察、開拓団、商工会、青年団、炭鉱、などの幹部約四十人が集まって相談した結果、軍の指示通り直ちに婦女子は、牡丹江方面へ南下避難させる。

男子は残って車とともにこの地を守ることなど決まりました。

その決めた途端に、ソ連機飛来、県庁舎近くに爆弾を投下しました。

相談ごととは他にもあったらしいが、轟音とともに会議は中断し蜘蛛の子のように四散して夫々職場や自宅に帰り、翌九日、住みなれた雑寧で夫に最後の別れのつもりで挨拶を申し上げました。ところが、夫は大きな声で『久子よくやってくれたな…この通りお礼だ』と微笑を浮かべて頭を下げられた。二人の子供を抱きあげて頼ずりして手放すと、『仁子と紀昭を頼んだぞ』と言って駅構内の雑踏の中に入って行った。夫の両眼に流れる光るものを見た私は、後髪を引かれる思いで、見送ったのでした。

十日、牡丹江に着き、ハルピン行き列車が配当なるままで、民家に宿泊したが昼夜を問わず、ソ連機の爆撃にあい、その都度右往左往し生きたこちはしなかった。

ようやくハルピンへ奉天へと列車がきまり、ものすごい混雑の中、見失われないように、当時六歳の長女を前に歩かせ、二歳の長男を背負って無蓋貨車に乗りました。

行動は夜停車した貨車めがけて、ソ連機からの銃撃がある度毎に「伏せ」の声と同時に汽車から飛び下り、地面に伏せる動作の繰り返しでした。

何時も何人かは倒れて死んだ屍に家族の方々が群がって悲泣の声は今も思いだすと眠れない日があります。

二、三人離れた車内で立ったままの男の人が腹の傷からウジをピンセットでつまんで捨ているのをみました。

二か月半後、奇しくも主人と奉天で巡り合いました。その時、主人はハルピン駅で、迷子になっていた女の子を連れていました。この子は、たまたま長女と同じ年で、親は車内でウジをピンセットでとっていたあの人の子供とわかりました。直ぐ送りとどけましたが、喜ぶと思っていたのに夫婦共ボーッとして放心していたのが、記憶にのこっています。

帰国後も気になっていたのですが、昭和五十九年福岡市のホテルで再会、あの時の父親は十七年前に亡くなり、母親と娘さん二人に会いました。

娘さんは主人に「おじさん」と大声で叫んで駆けよっ

て来ました。

主人は自分の娘も他人の世話になっているのではと、自分が食べるものも食わずに連れて歩いたと言うんです。後日娘さんから「ハルピン駅で泣いていた、私を連れて来てくれたおじさんのお陰で残留孤児にならなくてすんだ。父親は、ひと目お会いしてお礼をしたいと何時も気にしていた。

ホテルから帰って、母親と仏前で恩人と再会できたと報告しました。母親が元気になったら山形を訪問したい。」と手紙がきました。

あの天地動転のような地獄さながらの混乱の中で主人が人助けをする心の餘裕があったと知りうれしかった。

私の歩んだ軍隊生活と戦後

福島県 植田 三郎

昭和十年現役兵として、朝鮮羅南山砲二五連隊に入営した。昭和十三年三月に満期除隊後、ソ満国境の張鼓峯

で日ソ交戦と言うニュース発表後間もなく、臨時召集で仙台野砲二連隊に入って、同日夕方仙台駅を出発した。常磐線経由で出発羅南の元隊に戻った時、すでに停戦協定になっていた。山砲中隊は、出動して十八人が名譽の戦死、私共召集は予備として三か月程で召集解除となった。現地で除隊する者は会社、工場などに就職する者が多かった。私も昭和十三年十月頃、満州国敦化第八野戦航空修理庁に軍属として就職した。各地にも出向した。昭和十六年の春、一時帰国し、郷里で結婚式を挙げ牡丹江省梅林に到着した。戸数三百戸程の満人部落であった。飛行場と三戸程の官舎があり、そこに居住した。満州の春はかけ足でやって来て、野や山に名も知らぬ草花が咲き乱れ、平凡ながら平和な生活だった。昭和十七年長男が誕生した。

昭和十八年には、本庁の蘭崗に転属になり毎日が忙しく残業が続いた。そんな頃、父の危篤の電報が来て、上司の許可を得た。父の好物の甘い物を酒保から一か月分の配給を受けて、朝鮮経由で帰国の途についた。各駅からは、窓から出入りするような命がけの旅だった。父親と